

ロシア史におけるカシモフ皇国

中 村 仁 志

はじめに

15世紀の半ば、ロシアに君臨するモスクワ大公ヴァシーリー2世の支配領域内にタタール人の一地方勢力が出現する。モスクワの南方を流れるオカ川の流域にメシチョーラと呼ばれる地域があった。このメシチョーラの地に、チンギス汗の血統者で、タタール人国家の汗家の出身であったカシムなるタタール人の皇子がヴァシーリー2世から所領を与えられたことにより成立したのが、カシモフ皇国である。

カシモフ皇国は、初代の君主のカシムが、カザン汗ウルク＝ムハンマド（ウル＝ムハメッド）の息子であったことからカザン汗国と深いつながりをもっていた。カシモフ皇国におけるカシムの血統は二代で断絶するが、その後も、ロシアはタタール人諸国家の汗家の血筋をひく者たちをカシモフ皇国の支配者の座にすえつづける。タタール人勢力、とりわけカザン汗国に対する外交政策の柱として利用するのが、その目的であった。このため、1552年のロシア国家によるカザン汗国の征服・併合は、ロシアとカシモフ皇国の関係に大きな変化をもたらすことになる。対カザン外交における切り札としての意義を失ったカシモフ皇国に対し、ロシア政府は、その国家内国家とも言うべき特別の地位、独自性を尊重しないようになっていく。そしてついには、17世紀のカシモフ皇国の廃絶にいたるのである。

以上述べてきたことから明らかなように、ロシアにおけるカシモフ皇国の歴史は、1552年のカザン汗国の征服を画期として、前半期と後半期の二つの時期

に大別しうる。このうち前半期については、カザン出身のラヒムジャノフが、1445～1552年にかけての時期を通史的にあつかった一書¹⁾を近年ものし、カシモフ皇国の成立には、カザン汗国の初代の君主ウルク＝ムハンマドが深くかかわっているとして成立の事情の見直しを提唱している。

一方、後半期にかんしては、『「聖なるロシア」のイスラーム：17-18世紀タタール人の正教改宗』²⁾において、ロシアの君主に仕えたタタール人の動向を軸にすえてロシア正教とイスラームの問題を論じた濱本真実氏が、同書の第4章「17世紀のカシモフ皇国」において、カシモフ君主のサイイド・ブルハンのロシア正教への改宗の問題を中心に、カシモフ皇国の消滅にいたる過程を分析している³⁾。

本稿では、近年内外で盛んになりつつあるこうしたカシモフ皇国についての研究動向を念頭に置きつつ、ロシアにおける特殊な国家的組織であったカシモフ皇国のありようについて検討をくわえる。ロシアの地にチンギス汗の血統者であるイスラーム教徒のタタール人を支配者としていただく「国」が存在したのは、着目すべき現象であったことはたしかであり、これがどのような特徴をもち、ロシア＝タタール関係の展開のなかでいかなる役割をはたしていたのかを分析していく。

1 カシモフ皇国とカシモフ汗国

カシモフ皇国 *Касимовское царство* とは、カシモフ *Касимов* の皇帝＝ツァーリ *царь* が支配する国の意である。このうちカシモフは、同国の初代の君主であったカシムの名前に由来している。カシムはメシチョーラにおける支配の拠点として都市メシチョールスキー・ゴロドーク、すなわち「メシチョーラの町」を得るが、この町は、その後、彼の名前にちなんでカシモフと呼ばれるようになる。「カシムの町」ことカシモフに居をかまえるタタール人の皇帝＝ツァーリが君臨するのがカシモフ皇国というわけである。

カシモフ皇国という表現は、歴史研究のうえで通例使われる用語であり、歴史事典はもとより、一般の百科事典でも、この名前が項目がたてられることが

多い。ただ、これ以外に、カシモフ汗国 Касимовское ханство と呼ばれる場合もある。カシモフの汗 хан が支配する国の意である。すなわち、カシモフの皇帝＝ツァーリは汗でもあったというのである⁴⁾。

皇帝＝ツァーリがまた汗であるというのは、ロシアの歴史がしからしめる現象である。ロシアでは、この地がルーシとよばれた古代より、その君主は公であり、後に諸公が分立するようになると、諸公のなかの第一人者である大公がロシア全体の首長とみなされるようになる。これに対し、「ツァーリ」の語は元来、ビザンツ帝国の皇帝を意味していた。ビザンツ皇帝の居所たるコンスタンティノーブルは、古代ロシアでは、ツァリグラード、すなわち「ツァーリの町」と呼ばれたのである。

13世紀になると、ビザンツ皇帝にくわえ、新たなツァーリが出現する。チンギス汗の孫バトゥを総大将とするモンゴル人の西方遠征を契機としてキプチャク汗国が成立し、ロシアを「タタールのくびき」⁵⁾のもとにおくと、キプチャク汗もまた、ツァーリと呼ばれるようになる。キプチャク汗たるツァーリは、あまたいたロシアの諸公のなかから自分の眼鏡にかなった一人を選んで、その人物にヤルリクと呼ばれる勅許を与えて大公の地位を保全し、彼をつうじてロシアの諸公国からの貢税をとりたてたのである。

一方にビザンツ皇帝たるツァーリ、他方にキプチャク汗たるツァーリ。二人のツァーリがロシアをはさみこむようにして維持されていた国際秩序は、15世紀になると大きな転換点を迎える。1453年、オスマン朝のメフメット2世の攻撃によりコンスタンティノーブルが陥落して、ビザンツ帝国が滅亡。以後、ビザンツ皇帝としてのツァーリは存在しなくなる。

もう一人のツァーリが君臨したキプチャク汗国も、15世紀になると解体・分裂の過程をたどっていった。そのなかからカザン汗国、クリミヤ汗国、大オルダ、アストラハン汗国、ノガイ・オルダなどのキプチャク汗国の系譜を引く国家があらわれる。これら一群のタタール人国家では、ノガイ・オルダをのぞき、チンギス汗の血統者が汗として君臨した。この汗たちもまた、ロシアではツァーリと呼ばれたのである。

カシモフ皇国は、これらの汗＝ツァーリの一人であったカザン汗国の君主、ウルク＝ムハンマドの皇子カシムを初代の支配者として成立した。このため、他のキプチャク汗国の継承国家になぞらえ、ツァーリたる汗をいただく皇国、汗国と呼ばれるのである。

とはいえ、カシモフ皇国には、他の継承国家にはないような特徴もあった。その典型的な現象が、汗＝ツァーリ以外にもう一つ君主をあらわす言葉としてスルタンがあったことである。この点、カシモフ皇国でありカシモフ汗国であったこの国は、カシモフ・スルタン国でもあったといえよう。ロシアにおいて汗がツァーリと呼ばれたのに並行して、スルタンはツァレーヴィチと呼ばれた。汗＝ツァーリに対してのスルタン＝ツァレーヴィチである。

スルタンなる語は、カシモフ皇国においては支配秩序の頂点に立つ君主を意味する一方で、王座の後継者を含め君主の息子たち一般もさしていた。君主の称号が皇子のそれとしても使われたのである。裏返せば、皇子としてスルタンであった人物が、君主の地位を継承した後も、称号のうえではもとのままということがあったのである。

カシモフ皇国にあつては、支配者となったものが必ずしも汗＝ツァーリの称号を得たわけではなかった。初代の支配者のカシムがそうであったように、スルタンが、スルタンのままで君主となった。ラヒムジャノフによれば、これはカシモフ汗国の従属的な地位をあらわす特徴の一つであり、他のタタール人の諸汗国では見られない現象であった⁶⁾。

カシモフ皇国のスルタン＝ツァレーヴィチが皇子であり君主でもあったというのは、かつて強盛を誇ったキプチャク汗国が解体・分裂していくなかで生じたロシアとタタール人勢力のあいだの力関係の変化を反映した過渡期の現象として理解されよう。

「タタールのくびき」のもとではキプチャク汗＝ツァーリは、ロシアの宗主であった。ロシアの諸公中の第一人者である大公の称号をわがものにしようとする者は、キプチャク汗より下し与えられる勅許を得てその地位を安堵されなければならなかった。15世紀半ばにカザン汗ウルク＝ムハンマドの皇子のカシ

ムに所領を与えてカシモフ皇国を成立させたモスクワ大公ヴァシーリー2世にしても、この伝統的なロシア＝タタール関係から自由な存在ではなかった。ヴァシーリー2世は、かつて1430年代はじめにキプチャク汗時代のウルク＝ムハンマドによって大公の地位にあることを認められたという経験をもっていたのであり、キプチャク汗を頂点とする序列の階梯のなかに自身を位置づけていたのである。

となれば、である。もし、カシムがあらたなタタール人国家であるカシモフ皇国の君主として汗＝ツァーリとなるのなら、形式上、彼は大公の上位者になってしまう。モスクワ大公ヴァシーリー2世は、自分が設立した従属国の君主の下座にすわることになるのである。カシムがスルタン＝ツァレーヴィチにとどまったのは、こうした逆転現象を避けるための便法として理解されよう。一見したところ、君主なのか皇子なのか判然としない称号には、それなりの政治的有用性があったのである。

カシモフの君主とロシアの君主の上下関係をめぐり、このような特段の配慮を不要なものとするには、ロシアの君主がツァーリとなる、それもタタール人国家の君主である汗＝ツァーリをしのぐような「ツァーリの上に立つツァーリ」となるのを待たねばならない。

ヴァシーリー2世は、1462年に世を去るまで、大公としてロシアを支配した。そのあとをついだ息子のイヴァン3世は、ロシアの君主としてはじめてツァーリを名のる。ただ、イヴァン3世の時代にはツァーリの称号は、いまだ限定的に使用されるにとどまった。ロシアの君主が本格的にツァーリを名のようになるのは、イヴァン3世の孫で、1533年に即位したイヴァン4世（雷帝）の代になってからのことである⁷⁾。

そして、このイヴァン4世時代の1570年代よりカシモフ皇国の君主の称号は、スルタン＝ツァレーヴィチから汗＝ツァーリへと変わる。ただし、ラヒムジャンフが指摘するように、この現象は、カシモフの地位上昇ではなく、下降を証するものであった⁸⁾。イヴァン4世は1552年にカザン汗国、56年にはアストラハン汗国と、ヴォルガ川流域にあった二つのタタール人国家をあいついで征服

し、ロシアの版図に組み入れていった。かくしてロシアの君主たるツァーリは、かつてもろもろの汗＝ツァーリが支配した国々を包含する大国の統治者となった。すなわちツァーリの上に立つツァーリである。ここにいたり、ロシアの君主に従属するカシモフ皇国の君主が汗＝ツァーリの称号をおびることも支配秩序を混乱させる要因ではなくなってきたのである。

2 ロシア史におけるカシモフ皇国

カシモフ皇国はロシア史の文脈のなかでは、いかなる存在と定義されるのか。ソ連期に出たソヴィエト歴史百科のカシモフ皇国の項目⁹⁾は、その冒頭で分領公国 *удельное княжество* という定義を与えている。これはまた、ソ連崩壊後のロシアで刊行された百科事典形式の『祖国史 古代より1917年までのロシア史』のカシモフ皇国の項目¹⁰⁾でも同断である。さらに、ロシアで出た一般の百科事典においても然りであり、62巻本の『大百科』のカシモフ皇国の項目¹¹⁾は、分領公国という語で記述をはじめている。

分領公国とは、文字通り、分領公 *удельный князь* が支配する小公国である。かつてキエフに座する公を頂点としてゆるやかながら政治的統一を保っていたルーシは、リューリク朝の家門に属する複数の公家の自立により、12世紀半ばまでに十数の諸公国へと分かれていった。これらの公国の内部にあっても、君主の相続に際して、公家の成員のあいだで分割相続がおこなわれた結果、公国の領土の一部を自分の取り分、すなわち分領 *удел* として得た分領公が叢生し、おのおの分領公国を形成した。これら諸公国・分領公国が多数分立するようになった中世ロシアの分裂状態を指して分領制と呼ぶ。

公であった父が死亡した後に、その後継者となって公位についた息子からすれば、自分とならんで公領の一部を受け継いだ兄弟たちが分領公である。さらに、その前の代に、祖父から父へと公位が継承されるにあたって父とならんで分割相続により公領の一部を得た叔父たちもまた、彼らが分離・独立して自身の公国を創建しようとせず、旧来の公国の枠内にとどまるかぎりは分領公ということになる。

後代、分裂したロシアを統一する事業をにない、その内部にカシモフ皇国を擁することになるモスクワ大公国も、もとはといえばウラジーミル大公国内の一分領公国としてはじまっている。スウェーデンやドイツ騎士団との戦いに勝利して勇名をはせ、ロシアの国民的英雄とみなされているアレクサンドル・ネフスキーの末子であったダニイルが13世紀に分領としてモスクワを得たことが、そのはじまりである。その後、歴代のモスクワの君主たちが首尾よく勢力伸長をはたした結果、モスクワ公国は、そのなかに分領公国を生み出しつつ領域を拡大して大公国に昇格、ついにはロシア全土を支配下におさめるにいたったのである。

分領公は公家の一員としては、一門の長である公に従属する身であったが、分領公国のなかにあっては、独自の統治機構、軍隊をみずからの支配のもとにおく、なかば独立の君主であった。この点、分領公国は公国の枠内におけるミニ国家とみなされる存在であった。

では、カシモフ皇国はいかなる意味で、分領公国と呼ばれるべき性格をもっていたのか。カシモフ皇国の初代の支配者カシムは、当時のモスクワ大公ヴァシーリー2世とは血統上のつながりをもっていなかった。ここからすれば、カシモフの君主は通常の意味での分領公ではない。ヴァシーリー2世の近親者であり、モスクワ大公家の家門の成員であった他の分領公たちとは明らかに違う立場にあった。

それにもかかわらず、カシモフ皇国が分領公国と定義されているのは、その自立的性格のゆえである。リューリク朝の血こそ引いていないものの、「タタールのくびき」時代にはそれを凌駕する貴種であったチングス汗の血統につらなるカシモフ君主は分領公に匹敵する権限をその支配領域内で行使しえる存在であったのである。

カシモフ皇国の君主の性格については、分領公に擬する以外に、扶持受領者 **кормленщик** になぞらえる見解も存在する。扶持受領者は、君主が地方行政のために派遣した代官などの役職者であり、中央政府によって国庫から俸給を支給されなかったかわりに、管轄下にある地域の住民が納める税の一部を自身の

扶持として受け取ることができた。

扶持 *корм* とは、ももとは家畜の飼料、ひいては人間の生活を支える糊口の糧の意味である。国家が全国の諸地域から徴収される租税をいったん中央の国庫に集め、そこから地方行政担当の役職者に俸給を支給する、そうした地方行政・徴税の機構が十全に整う以前の中世ロシアにおいては、役職者を地方の負担において養わせる扶持制 *кормление* がしかれた。扶持受領者は、中央からの俸給で生活費等をまかなうかわりに、徴税権の一端を行使して地方住民から自身の食い扶持を徴収したのである。

一方で公国内のミニ国家たる分領公国を統治し独自の軍事力を維持していた分領公、他方で地方における君主の役人であり自身の扶持料のかたちで租税徴収権の一部をにぎっていた扶持受領者、カシモフ皇国の支配者はいずれに近い存在であったのか。

分領公は、対外的にはモスクワ大公に従属する存在であり、モスクワ外交の一部として動いた。独自に外国と交渉したり、条約を締結したりすることは許されず、戦時にはモスクワ大公の命に応じて兵を出さねばならなかった¹²⁾。こうした外交分野におけるモスクワ大公への従属はカシモフ皇国の君主の場合も同様であった¹³⁾。

外交面では、いずれもモスクワ大公に従属する存在であったカシモフの君主、分領公であったが、内政面では、分領公の方が広範な権限を有していた。「分領公は自分の公国の内政においては、総体的に独立した存在であり、大公の側からの統制をあまり受けなかった¹⁴⁾」。

先に述べたように、分領公は公領の分割相続によって生み出された。父公が死亡して相続が発生すると、息子たちのうちの一人（通常は長子）が公位継承者となって公領の主要部分を相続し、他の兄弟は公領のそれ以外の部分を分領として相続して分領公となった。公は公国を、分領公は分領公国を支配したが、いずれの統治権も父祖である歴代の公たちがもっていた支配権を受け継いだものである。そのかぎりにおいては両者のあいだに本質的な違いがあるわけではなく、公は分領公の上位者ではあっても分領内の問題に自在に介入することは

できなかった。

これに対し、カシモフ皇国の君主の支配権は、初代のカシムがヴァシーリー2世によってメシチョーラに所領を与えられたのにはじまっている。統治権の由来においては、カシモフの君主と分領公のあいだには、明白な隔たりがあったと言わなければならない¹⁵⁾。

また、領内の住民に対してふるいえた支配の権限の範囲においても、カシモフ皇国の君主と分領公には大きな違いがあった。カシモフの君主は、分領公と同じく支配領域の住民たちから租税を徴収する権利をもっていたが¹⁶⁾、分領公のように領国の住民全部に対して支配をおよぼすことはできなかった。これは、カシモフの君主がロシア正教の信徒ではなく、イスラーム教徒であったという宗教上の理由によるものである。

13世紀に成立したキプチャク汗国は、当初はイスラーム圏の外にあった。14世紀前半に出たイスラーム教徒のウズベク汗のころよりイスラームの教えが広まるようになり、その流れはキプチャク汗国を継承したタタール人の諸国家にもおよんだ。事情は継承国家の一つであったカザン汗国においても然りであり、同国出身のカシムとその配下のタタール人たちはイスラーム教徒としてロシアに来たったのである。

中世・近代のロシアにおいては、ロシア正教の教えが社会生活全般を強く律しており、異教徒であるイスラーム教徒が正教徒のロシア人に支配をおよぼすことに対し、強い嫌悪と反発があった。このため、カシモフの君主は、支配領域内のタタール人とロシア人を相手にした際にそれぞれ異なる対応を強いられることになった。同じイスラーム教徒であるタタール人に対しては全般的な支配をふるいえたものの、ロシア人からは租税を徴収できるとどまったのである。こうした点から、ラヒムジャンフは、カシモフ皇国の君主は、領域内のタタール人に対しては分領公なみの権限を有していたが、ロシア人にとっては扶持受領者であったと評価している¹⁷⁾。皇国内の住民の宗教の別によって、君主の性格もまた変わったのである。

3 タタール人国家としてのカシモフ皇国

カシモフ皇国は、ロシア国家の領域の内部に存在し、ロシアの君主に従属したという点においては、ロシア国家の構成要素の一つであったが、同時に、チンギス汗の血統者を君主としていただくタタール人国家でもあった。タタール人国家としてのカシモフ皇国は、同国成立の以前からこの地域の名称であったメシチョーラにちなんで、メシチョーラのユルトとも呼ばれた。ユルトとはテュルク語で、遊牧民が居住する天幕をさすが、そこから転じて居住地、ひいては国土、国を意味する語である。メシチョーラのユルト、すなわちメシチョーラの国である。

ユルトとしてのカシモフ皇国は、カザン汗国やクリミヤ汗国、大オルダ、ノガイ・オルダなど他のタタール人のユルト＝国と相つうずる性格をもっていた。なかでもカシモフ皇国と関係が深かったのは、カザン汗国である。カザン汗国は、かつてキプチャク汗の地位にあって1437年に汗の座から追われたウルク＝ムハンマド¹⁸⁾によって1430年代の末に設立された。このウルク＝ムハンマドの息子で、1440年代にカザン汗国からタタール人の一団をひきいてロシアに來たりカシモフ皇国の創設者となったのがカシムである。

タタール人国家の一つとしてのカシモフ皇国のありようは、いかなるものであったのか。

国家体制の頂点にいたのは、いうまでもなくチンギス汗の血脈につながる汗であるが、厳密にいうと、汗となりえたのはチンギス汗の血統者のなかでも、その長子であったジョチの子孫たちであった。ジョチの子バトゥによってたてられたキプチャク汗国を含め、ジョチの家門の支配領域とその民は、全体としてジョチのウルス（領地、部衆）と呼ばれ、この内部に成立したタタール人の諸国家においてはジョチの子孫が汗として君臨した¹⁹⁾。

汗とその一族に準ずる貴種としては、ウラン（オグラ）なる人間集団があった。彼らもまた、チンギス汗の血を引く者たちではあったが、ジョチのウルスの系統のタタール人国家の君主の地位にはついていたことがない家系に属してい

た²⁰⁾。傍系の王族たちである。

チングス汗の一門をのぞく住民は、貴族層と庶民からなりたっていた。タタール人貴族の上層に坐っていたのは、バク（ベイ、ピイ）、ないしエミールと称される身分であり、彼らはロシアではクニャージ、すなわち公といわれていた²¹⁾。バクは、自身のウルスの支配者であり、タタール人部隊をひきいる軍事指導者であった。バクの子弟で、その後継者的な立場にあった者たちを、ムルザ（ミールザー）という²²⁾。ムルザの語はまた、タタール人の貴族一般をさしても使われた。

バクのなかでも最上位の地位にあったのが、シリン、パールイン、アルグイン、キプチャクの四つの名門氏族（後にマンギートがこれに加わる）の首長たちである。シリンを筆頭とするこれら名門氏族の首長たちは、カラチ・バクといわれ、カシモフ皇国ならびに近隣のタタール人国家においては格別の社会的威信をもった有力者であった。カラチ・バクを構成メンバーとする会議は、汗のかたわらにあって政務を議する一種の諮問機関として国政上重要な役割をはたしていた²³⁾。

ウラン、バク、ムルザなどの世俗の貴顕とならんで、イスラーム教の各種の宗教指導者たちもカシモフ皇国の社会の上層に位置していた。そのなかでも注目すべきはセイトであった。セイト、すなわちサイドは、預言者ムハンマドの子孫であり、その血統の故にイスラーム世界では特別の敬意をもって遇される存在であった。カシモフ皇国にあっては、宗教的指導者の長はセイトのなかから選ばれ、彼は皇国内で汗につぐ第二の地位にあるものとみなされた。さらに、注目すべきは、カシモフ皇国のセイトが、宗教的側面のみならず軍事的な分野でも活動したことである。セイトは、皇国の軍事遠征に参加して重要な役割をはたしたのである。セイトが軍務をになったのは、カザン汗国についても同じであった²⁴⁾。

カシモフ皇国の社会的エリートは、他のタタール人国家にいた血縁者と緊密なつながりを保っていた。先に述べたシリンをはじめとする有力氏族やセイトは、カザン汗国やクリミヤ汗国内の同族との交流をたやさず、タタール人国家

のあいだを互に行き来しつつ同族のネットワークを維持したのである。

貴族層に対し、カシモフ皇国の住民の大多数を占める平民たちは、どのような立場におかれていたのか。

平民の身分に属する人々は、大きくいって二つのカテゴリーに分かれており、その一つは、担税民であった。彼らは、汗やバクなどの皇国の支配層に対してヤサーク税という貢納をおさめる義務を負わされており、ヤサーク民と呼ばれていた。

これに対し、平民身分のなかには軍役の担い手となっていた人間集団もあった。カザークと呼ばれる人々が、それである²⁵⁾。下級の戦士層であったカザークは、バクやムルザのような封建的領主層とヤサーク民とのあいだに位置する存在であり、ヤサーク税を貢納する義務からは免れていたものの、軍事においては貴族層に従属する立場にあった。カザークは軍務における上級者でもあったタタール人貴族の下知を受けて、軍役をはたしたのである²⁶⁾。

タタール人の部隊は、指揮をつかさどる貴族層と、その命令のもとで戦うカザークからなりたっていた。騎馬兵力であった彼らは、ロシアの内部では統一と中央集権化をすすめるモスクワ君主のかたわらにあって、その敵対者と戦うため、また、対外戦争においてはロシアに遠征してきたタタール人勢力を迎撃するなどの目的で戦場におもむいたのである²⁷⁾。

軍事におけるロシア君主への勤務とならんで、カシモフ皇国のタタール人たちは、ロシアと外部世界との交渉に際しても看過できない役割をはたした。タタール人諸国家をはじめとする東方世界の言語と事情に通暁していたタタール人たちは、翻訳官・通訳として、さらには外交使節としての勤務もおこなったのである²⁸⁾。

おわりに

カシモフ皇国は、ロシアの支配者たるモスクワ大公がタタール人の皇子に領地を与えて形成させた従属国であった点で、ロシアとタタール勢力との関係における大きな転換点であったとされている。

例えば、ロシアの歴史を、森林地帯に住むロシア人とステップの遊牧民との関係を基軸にしてとらえたヴェルナツキーである。彼は両者の関係の変化によってロシア史を5つの時代に区分する。そのなかで、第3期にあたる1238-1452年は、ステップ勢力が決定的な優位を占めた時期で、ロシア人はキプチャク汗国のもとで「タタールのくびき」に服した。これに対して、第4期の1452-1696年はロシアの反攻の時期であり、「タタールのくびき」からの解放をはたしたばかりでなく、南方のステップに進出するようになる²⁹⁾。かくしてステップ勢力優位の第3期からロシアの優位の第4期へと時代が変わっていくにあたっての重要な契機として指摘されるのがカシモフ汗国の設立であり、ヴェルナツキーは同国が1452年に成立したとしたうえで、これをもって第3期と第4期を分かつ画期としている³⁰⁾。

こうした観点は、古来ユーラシアのステップ地域を移動して西方にきたった遊牧勢力と定住生活を営むヨーロッパ勢力とを対立の相においてとらえようとするものである。ステップに隣接するヨーロッパ勢力として長らく遊牧勢力の脅威にさらされてきたロシアの、遊牧勢力に対する優位への転機がカシモフ皇国の成立というのである。

ただ、一口に遊牧勢力といっても、その性格、歴史上はたしてきた役割はさまざまである。あいつぐ遠征でユーラシアの多くの地域を征服し巨大帝国をつくりあげたモンゴルの場合、ユーラシアの東西を海と陸の両方でつないで人とモノの移動・交流をうながし、世界の一体化を進展させた。

遊牧・定住両世界を包含するモンゴルの巨大システムが成立したなかで、そのサブ・システムであったのがキプチャク汗国を中核とするジョチ・ウルスであり、「タタールのくびき」時代のロシアはその構成要素の一つであった。遊牧勢力と定住勢力の対立・抗争という図式ではなく、全体を一つの統合体とみなすこうした視点に立った場合、問題になるのはシステムの内部における中心の変化であろう。近代においてロシアは東方、南方へと勢力を拡大し、かつてのジョチ・ウルスの大半をその領域としてかかえこむことになった。かくしてジョチ・ウルスの西北辺境であったロシアは、そのあらたな政治的中心となっ

たのである。

この点からすると、カシモフ皇国の設立の意義はきわめて大きい。チンギス汗の血統者たる皇子に率いられたタタール人の一群を、国家内国家としてロシアが自身のうちに抱え込む。これはロシアがジョチ・ウルスのエリート層を自身の支配のもとへ組み入れるのにあたり、貴重なモデル・ケースとなったであろう。くわえて、カシモフ皇国と近隣のタタール人国家との人的交流のネットワークであり、これはロシアがキプチャク汗国の継承国家に影響をおよぼしていくのに大いに資したのである。

注

- 1) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство: 1445-1552 : очерки истории. Казань, 2009. с.47.
- 2) 濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム：17-18世紀タタール人の正教改宗』（東京大学出版会, 2009年）。
- 3) 濱本氏の研究は、君主のロシア正教への改宗の問題を中心にすえつつ、17世紀カシモフ皇国について、君主の権限やロシア宮廷における名目上の地位、タタール人貴族に与えられたカシモフ以外のロシアの町とカシモフとの比較などにかんしても興味深い論を展開している。
- 4) 研究者のなかには、ジミンのように、ロシアの君主に従属するこの国の性格のままに、従属国たるカシモフ公国 *вассальное Касимовское княжество* と表現しているケースもある。А. А. Зимин. Россия на рубеже XV-XVI столетий (Очерки социально-политической истории). М., 1982. с.234.
- 5) ロシア史における「タタールのくびき」については、栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会, 2007年）、Charles J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol impact on medieval Russian history*, Indiana University Press, 1985参照。
- 6) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с.69.
- 7) スルタンのロシアにおける呼称であるツァレーヴィチは、ツァーリが支配するようになったロシアでも使われるようになるが、あくまでツァーリの息子=皇子をさすにとどまった。カシモフ皇国のスルタン=ツァレーヴィチとは異なり、ロシアではツァレーヴィチは、あくまで将来の君主の候補である皇子を意味したのであり、その称号のままでも君臨することはなかったのである。
- 8) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с.66.
- 9) Советская историческая энциклопедия. т.7. М., 1965. с.85.
- 10) Отечественная история. История России с древнейших времен до 1917 года.

ロシア史におけるカシモフ皇国（中村）

Энциклопедия, т.2, М., 1996. с.517-18.

- 11) Большая энциклопедия, т.20, М., 2006. с.573.
- 12) А. А. Зимин, Россия на рубеже XV-XVI столетий, с.237.
- 13) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.64.
- 14) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.63.
- 15) さらに、公位継承における違いもあった。分領公たちは先代の公の死亡時にこそ公位を継承できなかったものの依然として有力な公位継承候補でありつづけた。中世ロシアでは、公位の継承にあたり長子相続とならんで、相続人候補のうちの年長の者が継ぐべきという年長制の原理もあったためである。公位を継いだ兄が死亡した後は、弟の分領公が年長制原理にもとづき亡兄の長子と公位を競いえる立場にあった。このため、同じ一門の叔父と甥のあいだで、しばしば深刻な公位争いが生じることとなった。リューリク朝の家門に属さないカシモフの君主はこうした公位継承問題とは無縁であったのである。
- 16) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.64.
- 17) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.64-65.
- 18) Уルク = Муханмадについては、Ю. Почекаев, Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с.228-243参照。
- 19) ジョチのウルスの支配者たちについては、赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年）参照。
- 20) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.69-70.
- 21) タタール人の諸勢力のなかでは、ノガイ・オルダの始祖エディゲイがチンギス汗の血統者でなかったため、彼の子孫であるノガイの首長たちは汗となることはできなかった。このためノガイ・オルダにあっては汗でなくベクが君主の地位についた。
- 22) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.72.
- 23) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.70-71.
- 24) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.74-75.
- 25) 平民身分の戦士をさす「カザーク」なる名称は、一般にコサックの名前で知られているロシアのカザークとの関連をほうふつとさせるであろう。ロシアの南部辺境に成立したカザークは、農奴制下の領主支配のもとからののがれてきた逃亡農民の流入によってロシア正教を奉ずるロシア人集団としての性格を色濃くするようになるが、初期のカザーク社会にあってはタタール人の要素が無視できない重みをもっていた。初期カザーク史とタタール人のかかわりについては、拙稿「初期カザーク史をめぐる諸問題」『ロシア史研究』第49号、1990年参照。
- 26) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство, с.77.
- 27) ロシアの君主に仕えるタタール人部隊は、自分たちと同じく騎馬兵力によって構成される遊牧民勢力に対抗するため使われることが多かったが、西ヨーロッパの軍隊を相手どっての戦いに動員される場合もあった。例えば、リボニア戦争におけるタタール人部隊の戦役については、Janet Martin, Tatars in the Muscovite Army during the Livonian War in

Eric Lohr and Marshall Poe edit., *The Military and Society in Russia, 1450-1917*. Brill, 2002参照。

28) Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с.80-81.

29) ヴェルナツキーの時代区分については、G. Vernadsky, *A History of Russia*. New Haven and London, 1951, pp.10-13参照。

30) ロシアの「タタールのくびき」からの解放の契機としては、一般には1480年にモスクワ大公イヴァン3世の軍勢とアフマートの率いるタタール勢とがウグラ河をはさんで対峙し、後者が兵を引いた「ウグラの対陣」がいわれるが、ヴェルナツキーにあつては、それよりもカシモフ汗国成立の意義が強調されている。